<Episode>

この歌は、天徳四年内裏歌合（左右2チームに分かれて歌で勝ち負けを決める大会）で、左側の歌として詠まれた。
対する右側は平兼盛「しのぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで」。このとき判者（審判）藤原実頼が決められず困っていると、村上天皇が兼盛の歌の方を口ずさんでいるのが聞こえ、こちらを勝ちにした。
落ち込んだ忠見は食べ物も食べられなくなり死んでしまい、成仏できず、しばらく「恋すてふ…」と言いながら夜な夜な内裏をさまよっていたそうな。

恋すてふ　わが名はまだき　立ちにけり
人知れずこそ　思ひ初めしか

（動）恋す（サ変終止）　（名）わが名は　（動）立ち（タ行四段連用）にけり
（名）人知れず（ナ変連用）こそ　（動）思ひ（ハ行四段連用）初めしか

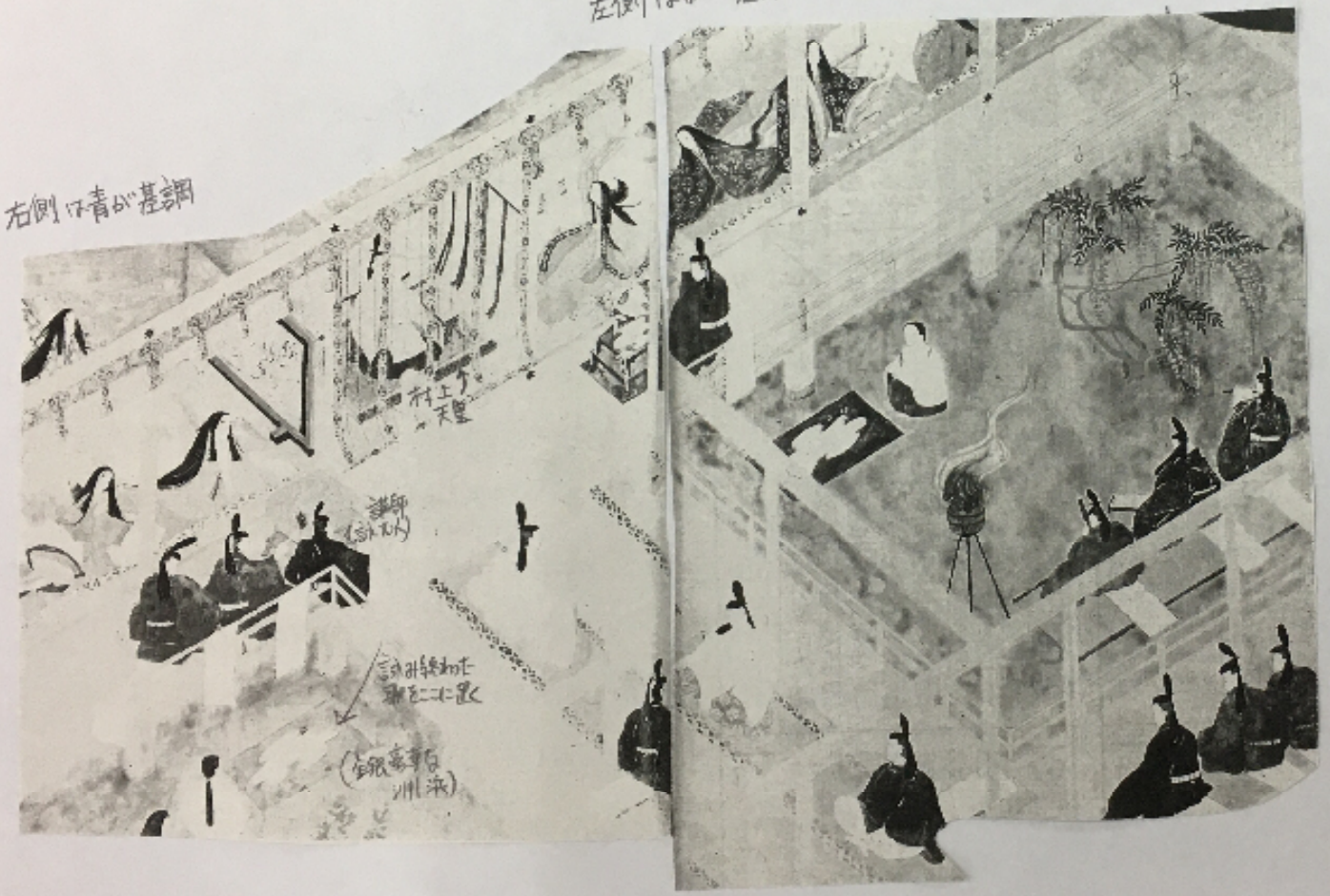
（訳）恋をしているという私のうわさが早くも世間に立ってしまったことだ。誰にも知られないようにひそかに思い始めたのに…。

壬生忠見

壬生忠岑（ありあけの…の人）の息子

左側は赤が基調

右側は青が基調



～ 天徳四年(960年)春　内裏歌合 ～　大内清涼殿にて